

手を拡大した。一九二〇年代のティリツヒの宗教社会主義思想には、同時代の社会主義思想から排除されてきた至福千年説的要素、革命的傾向が積極的に導入され、また社会主義思想に比して、その担い手は拡大された。

【ティリツヒのユートピア論】「待望と起源」ティリツヒによると、社会主義思想に欠けているのは超越的領域のみならず、「起源」である。この「起源」思想の危険性には注意を要する。たしかに、後にナチスに票を投じていく思想潮流である「政治的ロマン主義」も、「起源」の問題を課題としているのだが、急進的なフェルキツシュ思想のように何らかの原初的起源に回帰することに対して、ティリツヒは批判的だった。望ましい社会主義は、「待望」概念によって「政治的ロマン主義」から分かれる。「待望」とは「到来しつつある無制約的に新しいものを目指す」ものである。しかし、待望によって目指される「新しいもの」とは「起源」である。『決断』において、ティリツヒは「待望」の先に、従来の起源から飛躍した新たな制約的意識である「起源」を着地点として描いた。たしかに、一九二〇年代のカイロス論は垂直線に焦点を当て、現在の瞬間を強調するものであったのに対し、「待望」概念には未来に向かう視座があるという違いがある。しかし、この二つの概念より、宗教社会主義思想が既存の秩序からの飛躍を目指す変革の思想であると言い得る。

### 正義の重荷と恵み

—— E・ブルンナーの正義論を手掛かりに ——

今出 敏彦

E・ブルンナーの正義論の問題意識は、「正義とは何か」についてではなく、人間の「正義の感情」に対応する事柄の把握に向けられている。つまり、「正義が問題とするのは何か」を明らかにすることである。以下において、ブルンナーが彼の正義論において議論した西洋における正義の理念の崩壊という事態と、彼がその作業から擱んだ問題について分析し、正義について検討したい。

それでは、ブルンナーはどのような問題を擱んだのだろうか。それはウルピアヌスの正義の定義によって明示された所属の原秩序 (Urordnung)、つまり、「各人に彼(彼女)のものを」(suum cuique) 要求する人間の「正義の感情」に対応する事柄であり、人格倫理ではなく、制度の倫理として取り上げられるべき問題なのである。ブルンナーは、「神の正義と正しい国家形態との関係」を例に、「正しいあるいは正しくない」とは如何なることか、そして、「どこからこの区別に関する基準を得るのか」という問題に向かうことにした。

「各人に彼(彼女)のものを」。この尊厳ある平等は、その特質と機能における「相違」に結びつく。彼(彼女)には他者と交換出来ないものが与えられている。平等も不平等も、ともに万物を創造された神の意志に基づく。従って「相違」は、等しくない課題を共に担い、互いに能力を分かち合うという個人個人の義務が、真に人格的な愛の共同体の為であるだけでなく、そ

れが神から与えられているが故に、その個人の人格の尊厳は、共同体に優先していることを示唆するものである。

ここで、先述の問いである「神の正義(正義の原理)」と正しい国家との関係(共同体の再建)についてのブルナーの回答が提出されている(S.51)。つまり、人間は単に何かであるというだけでなく、何ものかに対する要求と権利を持っていて、彼(彼女)に「何ものかが属している」ということは、創造の中で基礎づけられている。そこから、各人に彼(彼女)のものを与える根源的配分としての正義の原理は、創造者である神の意志であるということ、そして、神の支配に基づき、神に属する人間は、共同体の再建という使命を、信仰を通して愛において実現する。かかる使命を担うか否かは、あくまでも個人の自由であり、誰も他の者が命じることでも代わることも出来ない事柄である。かかる自由は神のみが与え、取り上げることが出来る。つまり、主権は、ただひとり神にのみ属するということがある。

キリスト教的自然における人間の本性は、神によって造られた本源的なもの(規範的)と神に背を向ける離反的なもの(反規範的)として理解されている。正義の倫理が人格ではなく制度の倫理(共同性秩序の倫理)である理由は、人間の本性への深い理解に基づいている。神の創造秩序の目的は愛であり、それを地上で実現するために国家という共同体が造られた。法による強制は、人間を無政府状態の恐怖から保護し、愛に奉仕する為である。

では、キリスト者である愛の人は、いかにして愛を実践する

べきか。それは、直ちにその愛を正義に変換することである。例えば、労働者が労働の正当な報酬である賃金を、使用者から愛の施し物として提供される時、抗議するのは必至であろう。この例は、正義の要求は充たすことが出来るということだけでなく、愛は決して全うさせることがないということを示唆している。人は常に愛を充たすよう負っているという意味で、正義は重荷である。だが、もし、自らを全うする愛が存在するならば、それは間違いなく、限りなき神の愛であり、その重荷が恵みと感ぜられる所以である。

一九一三年のR・ブルトマン

——彼は神学的アヴァンギャルドなのか——

深井 智朗

雑誌『時の間』は今日では、第一次大戦後に誕生した、いわゆるヴェルヘルム世代へのラディカルな批判者である「ヴァイマルのフロント世代」として、既存の神学部で営まれる「大学の神学」や、国家道徳や国家の政治政策を支える政治神学や国家神学の手先になっていた既存の「国民教会制度」を批判し、破壊しようと試みた神学者たちの雑誌として知られている。しかしこの『時の間』には、この時代の新進気鋭「大学の神学者たち」であるブルトマンが参加している。なぜブルトマンはこのクライスに参加したのか。その問いに答えるために第一次大戦前夜の一九一三年のブルトマンの講演に注目してみたい。

ブルトマンは一九一三年九月二十九日にオルデンブルクの「自由協会」で「神学という学と教会的実践」という講演を行っ